

地域情報（県別）

【福井】「地域医療は医師だけではできない」自費の訪問サービスに配送業との連携も模索-紅谷浩之・医療法人社団オレンジ理事長に聞く◆Vol.3

2023年3月24日（金）配信 m3.com地域版

2011年の開業から在宅クリニック、外来診療所、医療的ケア児の支援施設などを運営し、地域活動も行う医療法人社団「オレンジ」（福井市）。多様に事業展開してきた紅谷浩之理事長は2021年、「制度の限界を感じ」自費の訪問サービスを始めた。ほかにも人口減少地域で配送業との連携も模索しているという。地方の医師が挑戦する医療の枠を超えた活動に注目した。（2023年2月18日オンラインインタビュー、計3回連載の3回目）

▼第1回はこちら

▼第2回はこちら



紅谷浩之氏（法人提供）

——外来診療所「つながるクリニック」のホームページに、「ナスくる」という訪問サービスを行っているとおあります。

当法人が2021年に始めた自費のサービスです。在宅医療や介護サービスが必要になる前の高齢者などを対象に、スタッフが毎月2回訪問するというもの。雑談を交わしながら体の状態を確認して、必要があれば地域の居場所やイベントを紹介したり、専門の医療者につないだりします。遠方にお住まいなどで「なかなか会いに行けない」ご家族に向けて、利用者の様子をまとめたレポートをLINEを使って画像付きで送っています。基本料金は税込みで月額1万1000円です。

——医療法人が自費の訪問サービスを行うのは珍しいと思いました。着想の経緯は。

制度の限界を感じたことが大きかったですね。私たちは在宅医療を行うクリニック、外来診療所、医療的ケア児の支援施設を運営し、みんなの保健室で地域活動を展開するなか、地域の人とつながりをつくる大切さを肌身に感じました。

つながりの重要性を指摘する科学的なデータも増えてきました。孤独感を抱えていたり、社会とのつながりが少ない孤立状態にあったりする人ほど病気や死亡のリスクが高まりやすい、とする研究結果です。

私たち医療者は、病気や障害、ADLの低下の主因は体の内側にあると教わってきました。しかし、生物医学的なアプローチだけでは不十分であり、社会医学的なものも大切だと考えるようになりました。

——国の制度では、病気になったら医療保険が、介護の必要性が生まれたら介護保険が適用されます。

今のところ、こういった制度のはざまを補える公的サービスがありません。例えば、介護保険制度にもとづく訪問看護サービスを受けることで利用者が元気になると、保険は使えなくなります。このときにつながりを保つ仕組みがあればどうでしょうか。新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の流行もあって孤立・孤独になりやすくなっているなか、ソーシャル・フレイルの予防や健康の維持に貢献できる可能性があるとは私は考えています。

現在は5人ほどが利用しており、ポジティブな感想が寄せられています。日本では国民皆保険制度が整っており自費のサービスに抵抗感を持つ人が少なくありません。利用者はあまり増えていませんが、次のステップとして高齢者向けマンションを運営している企業との連携も検討しています。マンションの共有スペースに看護師が訪問するようなサービスにニーズがないか考えています。

——医療の枠を超えた活動という点で、これからチャレンジしたいことはありますか。

2021年に福井県勝山市に開院した「勝山オレンジクリニック」で、医療と配送をコラボレーションできないか模索しています。勝山市を含む県北東部の奥越地方は少子高齢化と人口減少が進んでおり、医療だけでなく買い物にも不便を感じる人が少なくないと聞きます。「医療難民は買い物難民になりやすい」。こう考え、私たちが貢献できることはないかと。仮にドローンでの配送が増えていくとしても、つながり不足の軽減策として人が介在する価値は大きいでしょう。

アイデアは複数あります。訪問診療の際に買い物も持って行ってあげる。薬剤師の負担を減らすために配送業者が薬を運ぶ。その際は患者さん宅でタブレット端末を介して薬剤師が服薬指導をしたり、医師がオンライン診療を行ったりする——。地方では医療者が少ない人数で広範囲を訪問することがありますが、配送業とオンラインシステムをうまく絡めれば、医療・配送の双方にメリットが生まれる可能性があります。介護業界でもデイサービスなどの車は町中を走り回っていますよね。行き帰りのどちらかで車内は空いており物が入るスペースがあるので、こうした状況を生かせないでしょうか。

現在、地域の配送業者と連携して配送員にクリニックのメンバーとして加入してもらっています。今後、形にしていきたいです。

——「人手不足」と言われる物流・配送業との連携は興味深いです。法人には現在、100人ほどのスタッフがいるとのこと。多くの人を巻き込んで事業展開できている理由をどう考えていますか。

「地域医療は医師だけではできない」。こう確信していることが影響しているのではないのでしょうか。患者さんの生活の場で看取りも含めて医療を行っている、その人を支えるためには医師の知識と技術だけでは不十分だと痛感します。さまざまな人が関わることで、気付きや解決策、選択肢の幅が広がるのです。

スタッフを信じることも大切にしています。医療・福祉業界を目指す人は根底に、「人を元気にしたい」「幸せにしたい」という願いがあるのだと考え、彼ら彼女らのエネルギーを信じて強みを発揮しやすいよう自由と権限を与えるようにしています。

今まで150人ほどを雇用してきましたが、人材会社の利用など採用にお金をかけたことはありません。私たちの取り組みや思い、スタッフが楽しそうに働いている姿をホームページや各種SNSなどで発信し続けていると、「面白そうだ」と連絡をくれる人がいます。そんな人が絶えていないことはうれしい特徴です。

◆紅谷 浩之（べにや・ひろゆき）氏

2001年福井医科大学（現福井大学医学部）卒。救急医療やへき地医療などを経験し、2011年に在宅医療に注力する「オレンジホームケアクリニック」を開院。「地域の人と早くつながりたい」と2016年に外来診療所「つながるクリニック」を、2022年にクリニックとカフェ、ジムが入居する複合施設「つながるベース」を開設した。医療法人社団オレンジ理事長。

【取材・文＝医療ライター庄部勇太】

記事検索

ニュース・医療維新を検索

